連載小説
まちおこし特命社員 石打悠太

「馬鹿者」を命ず！

第八回 迫り来る伊予南市の危機 その一

渋谷和宏
イラスト●丹下京子

登場人物

石打悠太（いしうち・ゆうた） 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がける大学発のベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの若手社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。

榎太一（えのき・たいち） 76歳、二名島バッテリーの創業者で社長。ビジネスの世界ではカリスマ創業経営者として知られる。

新庄誠人（しんじょう・まこと） 39歳、伊予南市役所・地域振興課長。

大渡晴美（おおわたり・はるみ） 45歳、伊予南市長。薫子の母。

松島秀人（まつしま・ひでと） 34歳、オーナーシェフ。東京で修行した後、「パン焼き工房まつしま」を故郷である伊予南市の山の中に開店する。

青山麻衣（あおやま・まい） 24歳、悠太の元カノ。就職した大手有名ネット通販会社の先輩から交際を申し込まれ、悠太をふるのだが……。

四分地恒三（しぶち・こうぞう） 59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。

喜多嶋翔（きたじま・しょう） 25歳、西朱雀プロジェクト社員。悠太の1年先輩。

前回までのあらすじ
大渡市長の批判に自信を喪失した悠太は、会社にギブアップのメールを送り、傷心の旅に出る。山あいの洒落たカフェにたどり着く。そこで偶然にもカリスマ経営者、二名島バッテリーの社長・榎太一に出会うのだが……。

「君はこちらの話に聞き耳を立てていたようだが、すべて忘れてもらいたい」

榎太一の口調には有無を言わさない圧迫感があった。

悠太は反射的に「はい」とうなずいた。

榎は立ち上がり「お勘定を」と、オーナーシェフらしい口ひげの似合う男に声をかけた。

男はすかさず「かしこまりました」と丁寧な口調で答えた。年齢は三十代前半、山の中のレストランには不釣り合いなほど洗練された雰囲気だ。

「私の支払いだけではなく、この若者の分も頼む」

「いえ、それは……」

榎の言葉に悠太は慌てて手のひらを振った。

「迷惑料だ」

「別に迷惑なんかかかっていません」

榎は悠太の顔を興味深げに見つめた。

「君、どこかで会ったかな」

「会っていないです」

「どこかで会った気がする」

「それはないです。もしどこかで榎さんに会っていたら、僕の方が絶対に覚えています。あ……！」

悠太は「しまった」と心の中で続けた。

「私を知っていたのか」

榎は唇の端に微妙な笑みを浮かべた。

「それならなおさら、先ほどのやり取りは口外無用だな」

榎は重厚な光をたたえた目で悠太を一瞥し、カードで勘定を支払い、店を出ていった。

腰を揺するように大股で歩くその様が、だれかに似ている気がした。

席に戻った悠太はカップに残っていたコーヒーを飲み干し、鞄を手にして立ち上がった。

大正大学地域構想研究所ホームページ（http://chikouken.jp/chiikijin）では、連載小説「『馬鹿者』を命ず!」のバックナンバーを閲覧できます。

「ごちそうさま」と言って店を出ようとした悠太に、

「東京からいらっしゃったんですか」

とオーナーシェフらしい男が声をかけた。

「生まれは神奈川県の海老名ですけれど、わかりますか」

「わかりますよ。言葉や雰囲気で。実は僕もしばらく東京にいたんです」

「東京からここへ来てお店を開いたんですか」

悠太は好奇心を抑えられず、思わず前のめりになって聞いた。

「生まれは伊予南市です。東京のベーカリーレストランで修行して、今年一月にここに店を開きました」

「Uターン組なんですね」

「ええ、妻はIターンですけれどね。彼女は東京の出身です」

悠太はテーブルの後片付けをしている女性の方を振り向いた。女性は感じの良い笑顔で会釈した。

「でも、どうして〝ここ〟なんですか？　あ、すみません、僕はこういう者なんです」

悠太はリュックから名刺入れを出し、まちおこし特命社員の名刺を渡した。

渡してから、まちおこし特命社員の任を解いてもらうつもりだったのを思い出した。

オーナーシェフは興味深げに悠太の名刺を見つめ、レジの横に置いてあるショップカードを渡した。「パン焼き工房まつしま代表・シェフ　松島秀人」と書かれている。

「おっしゃるようにどうして〝ここ〟なのかと普通は思いますよね。辺ぴな山の中ですから」

松島はにっこり笑い「理由は景色なんです」と言った。

「景色？」

「このあたりは周りよりもひときわ高い丘陵になっていて、景色が素晴らしいんですよ。そうだ、雨も上がったのでちょっと見ていきませんか」

悠太はうなずき、松島シェフに続いて店を出た。

松島は店を回り込んで裏手へ行き、樹々が途切れたあたりに立った。

松島が指差す方向を見下ろした悠太は、思わず息を呑んだ。

店の裏手からは伊予南市の変化に富んだ地形と風景が一望に見渡せた。

眼下には山々のこんもりした緑が続き、森が途切れるあたりから市街地にかけて田園が広がっている。そのほぼ真ん中を一筋の河が伸び、海へとつながっている。雲間から顔をのぞかせた太陽に照らされて、海面は宝石をちりばめたように美しくきらめいている。

「すごいですね……」

悠太は興奮気味に言い、松島はにっこりとした。

「初めてこの風景を見た時、あまりにも素晴しくて、ここに店を開けたらいいなと思うようになったんです。それで調べてみた

ら、伊予南市と中田市を結ぶ県道沿いにあるので市街地からも簡単に来られるし、交通量も意外に多いことがわかったんですよ」
「海もきれいですね……」
「伊予南市の海は天候や時刻によっていろんな表情を見せてくれるんです。雨の日、快晴の日、今のような雨上がり、朝焼け、夕暮れ……、来月にはここにテラス席をこしらえて、景色を見ながら食事できるようにしたいと思っています」
　松島は照れたような笑みを浮かべた。
「すみません、自分の話ばかりしてしまって」
「いえ、ここにお店を建てたかった気持ちがわかる気がします」
　悠太は眼下に広がるパノラマを見ながら、自分はこれまで伊予南市の何を見てきたのだろうと思った。事務所兼社宅周辺の街並み、日下部地区の森、二名島バッテリーの本社工場と、目にした風景はごくわずかだった。そんな人間にまちおこし特命社員なんて、やはりもともと無理だったのだ。
「僕がもし東京で暮らさなかったら、ここに店を開きたいとは思わなかったでしょうね。修行時代、恵比寿の裏通りにあるアパートに住んでいたんです。窓を開けると目の前は隣の雑居ビルの壁で、伊予南市の光景をよく夢に見ました。それでお盆休みに帰省した時、とにかく眺めの良いところに行きたくて、あちこち車を走らせたんです。それでここを見つけて……」
　松島は瞼をしばたたいた。
　頭上をトンビがゆっくりと弧を描いていた。

　伊予南市の先月の支出について、会計課の担当者が作成した報告書に目を通した大渡晴美は、読むべき書類はもうないのを確認してからため息をついた。デスクの上に置いたトートバッグから弁当を出して包みのキッチンクロスをほどく。
　時刻は午後二時過ぎ、ようやく昼食を食べられると思ったらケータイが鳴った。
　新庄からだった。
　晴美は電話に出るなり「どうだった？」と声を潜めて聞いた。
「銀行の担当者は包み隠さず教えてくれました。例のアメリカの投資ファンドはやはり二名島バッテリーの株をひそかに買い増していて、持ち株比率はすでに三十パーセントを超えたそうです」
「拒否権を獲得するまで間近ね」
「拒否権？」
「特別議決を拒否できる権限よ。買収や合併など会社の重大な決議事項を特別決議と言って、株主総会で承認を得るには全体の三分の二の賛成が必要なの。三分の一つまり三十三パーセントを超える持ち株があれば重大な決議事項を単独でことごとく拒否できるのよ。もし彼らが拒否権を得たら……」
「二名島バッテリーの経営に支障をきたしかねない」
「その通り、経営の独自性が失われてしまいかねないわ。それで？　株を投資ファンドに売ったのは？」
「こちらも市長のご推察の通りでした。元社員たちです。彼らは高値での買い取りを提案した投資ファンドに我先にと持ち株を売っているそうです」
　晴美はため息をついた。
　二名島バッテリーにはかつて社員持ち株会があった。創業期を支えた社員千数百人に株を持たせたのだ。二名島バッテリーは上場していないので市場で株の売買ができない。そこで社員たちが定年退職した後、その時点での評価額で株を買い取る約束を交わしたのだった。
　社員持ち株会の目的は二つあったと聞いている。一つは社員たちの引退後の生活を潤すため、もう一つは社員をいっそうやる気にさせるためだ。
　しかしその目論見は最悪の結果を招き寄せてしまった。投資ファンドは現時点での評価額を上回る株の買い取り価格を提示し、じわじわと持ち株比率を増やしているのだ。
「新庄くん、しばらくの間、例の投資ファンドの動きを知るために銀行の担当者と連絡を取り合ってくれない？」
「承知しました。でも市長、なぜそこまで？」
「以前言ったでしょう？　二名島バッテリーがいつまでもこの街を潤し続けてくれると考えるのは『明日ありと思ふ心の仇桜』だと。明日も咲いているだろうと思っていた桜も夜のうちに散ってしまうかもしれない。もし彼らが拒否権を得たら、特別決議に賛成するのと引き換えに、人件費の安い中国や東南アジアへの本社工場の移転を持ち出すに決まっているわ。そうなったら伊予南市で生まれた二名島バッテリーと言えどもここから撤退してしまうかもしれない。もし二名島バッテリーに出ていかれてしまったらどうなると思う？　二名島バッテリーの工場や物流センターで働いている伊予南市民はざっと四千五百人、家族まで入れると市の人口の四分の一を占める一万五千人が二名島バッテリーに食べさせてもらっているのよ」
「伊予南市の経済はガタガタになりますね」
　晴美は「絶対にそうはさせない」と自分に言い聞かせるように言い、電話を切った。
「パン焼き工房まつしま」を後にした悠太は一路、清谷に向かって中田市方面へと車を走らせた。松島シェフの奥さんが言っていたように県道はすぐ舗装路に戻ったが、起伏に富んでいる上に曲がりくねっており、悠太はスピードを抑え、慎重に運転した。
　尾根を上り、山頂付近の眺めのいい道に出たところで悠太は車を止め、リュックからスマホを出した。一度深呼吸してからメールの文章を書き始める。
「僕にはやはり、まちおこし特命社員の仕事は務まりませんでした。喜多嶋先輩に交替してもらうよう強くお願いしたいと思います」
　続けて大渡晴美市長とのやりとりを書いた。企画書を〝箸棒〟だと一刀両断にされたこと、詰めが甘いとこき下ろされたこと……。
　二度読み返し、誤字を直した悠太は四分地のアドレスを呼び出し、送信ボタンを押した。
　何となくほっとした気分で再び車を走らせ、なだらかなカーブを曲がり切った時、数十メートル先の路肩に車が停まっているのに気づいた。
　黒のレクサスだ。どうやら左側の前輪と後輪が側溝にはまってしまったらしい。レクサスの傍らには大柄な男が立ち、携帯電話で話をしている。
　榎太一だった。
　悠太はレクサスの後ろに停車し、車を降りた。
「君か」
　悠太に気づいた榎は心なしかほっとしたような顔をした。
「恥ずかしい話だが。考えごとをしていて側溝に落ちてしまった」
「日本自動車連盟には？」
「会社の者を呼んだよ。レッカー車でやって来いと。一時間ほどで来てくれるだろう」
　榎は何かに気づいたように悠太を見つめた。
「とはいえ、私はたとえ一時間でも無為に過ごすのが耐えられない性分でね」
「はあ」
　榎は一歩、悠太に近づいた。
「君も中田市方面に行くんだろう？　それならタクシーを呼べるところまで乗せていってくれないか。この先の峠を越えたあたりにスーパーがあるはずだ」
「でも榎さんの車は？」
「とりあえず放っておくさ。故障がなければ社員にレッカー車で目的地まで運んできてもらう」

「目的地って……」
「清谷だ」
悠太は口をあんぐりと開けた。目的地は一緒だった。

たまっていた資料や報告書に目を通した晴美は、新庄のケータイに電話を入れた。
すぐ電話口に出た新庄に晴美は挨拶もなしに「今、あなたの手を借りていいかしら」と切り出した。
「どういったご用件ですか」
「連れていってもらいたいところがあるの」
「どちらへ？」
「〝本町の家〟」
「〝本町の家〟って、まさか例のファンドの件で新たな展開があったんですか」
「そうじゃなくて、何だか胸騒ぎがするのよ」
新庄は一拍置いてから「わかりました。駐車場で待っています」と言った。
新庄が運転する軽自動車は雨上がりの道をいつもよりスピードを出して走った。晴美にはそれでももどかしく感じられて、交差点で止まるたびに小さく舌打ちした。
晴美の普通ではない様子に新庄は「かなり気になさっていることがおありのようですね」と聞いた。
「思い出したのよ。あの人は人並み外れて決断が速い人だって。液漏れを起こさない次世代の全固体電池の開発に乗り出した時も即断即決だったわ。今度も同じかもしれない」
「今度とおっしゃいますと、まさか二名島バッテリーの本社工場の移転？」
晴美はうなずいた。
「いくらなんでも速すぎませんか。ファンドが二名島バッテリーの株を買い増し始めたのはつい最近ですよ」
「ファンドにあれこれ口を差し挟まれる前に決断するのよ。あの人ならやりかねないわ。ファンドの機先を制することができるし、そもそもあの人は冷徹な合理主義者だから」
「お言葉ですが、取り越し苦労のようにも思えて来ます」
「そうかもしれない。そうならいいと私も思う。でも、そうではないかもしれない。だから会って、あの人の本音を聞き出してやろうとしているのよ」
「もし本音では移転を考えていたら説得しますか」
「当たり前じゃない！　体を張ってでも食い止めてやるわ。それが市長である私の仕事よ」
新庄はさらにアクセルを踏み込みスピードを上げた。

「さて……と」
晴美は鞄からスマホを出した。
「これから〝本町の家〟に電話を入れるわ」
「まだ連絡していなかったんですか」
「普通なら日曜日のこの時刻は必ず自宅にいるの。何かあっても担当者に来てもらっているわ。でも、もしいなかったら」
「いなかったら？」
「悪いけれど、あの人の立ち回り先まであなたに連れて行ってもらうわ。最初からそのつもりで、あなたに運転をお願いしたのよ」
晴美は電話口に出た相手に名前を告げた。
大柄な体を窮屈そうにラパンの助手席に沈めた榎は長い脚を組み、じっと物思いにふけっていた。
榎がなぜ清谷に行こうとしているのか悠太には見当がつかなかった。人里離れた景勝地で英気を養いたいにしては背広姿で深刻な顔をしているし、おまけに何一つ荷物を持っていないのだ。
まさか自殺するつもりでは？　いや、死を意識している人間のたたずまいではない。全身に生気がみなぎっているし、ある目標に向けてひた走っている強い意志を感じさせる。だとすると何が目的なのだろうか。
「君は私が何のために清谷に行こうとしているのか疑問に思っているんじゃないか？」
「わかりますか？」
図星を突かれた悠太は思わず甲高い声を出した。
「その顔を見ればわかる。君は隠し事とか面従腹背といったサラリーマンの得意技が苦手なようだな」
「それもわかりますか？」
悠太は麻衣に対して嘘をつき通せなかったのを思い出した。麻衣はいまどうしているだろう。
「案外捨てたものでもないぞ。もしかしたらそれが君の持ち味になるかもしれない」
「はあ」
「経営判断だよ」
「はい？」
悠太は意味がわからず、榎の次の言葉を待った。
「私が清谷に行く目的だよ。聞きたかったのだろう？　君は清谷に行ったことがあるか」
「今度が初めてです」
「素晴しい土地だ。空気は張りつめ、山々はあくまで峻厳で、俗っぽいところがみじんもない。そんな清谷の〝気〟に接していると神経が研ぎ澄まされていく気がするんだよ。だから私は大事な判断を下さなければならない時には清谷に一泊でも二泊でも逗留して考え抜くんだ」
悠太は感心した顔でうなずいた。さすがは一代で巨大企業を築き上げたカリスマ経営者だ。考えごとをするために場所を選ぶなんて悠太には想像さえつかなかった。
「そう言えばまだ君のことを聞いていなかったな。伊予南市に住んでいるのか」
「はい、一応……」
「出ていきたいと思ったことはないかね？」
またも図星を突かれて悠太は「あります」と甲高い声で答えた。
榎は愉快そうに笑い「そういうことなら、ちょっと君の気持ちを聞かせてくれないか」と言った。
「ある人間が伊予南市に住んでいたとする。それなりに地元にとけ込み、必要とされていたが、街の外にもっといい仕事が見つかりそうになった。本当のところ街の人間たちを好きになれない。そこで街を出ていこうと思う。君はその人間の決断に賛成かね、それとも反対か？」
「もちろん賛成です。僕はその人の勇気ある決断に一票入れます」
悠太はきっぱりと答えた。街を出ていきたいのは自分も一緒なのだ。
「いい答えを聞かせてもらった」
榎はニヤリとしたが、その目はもう笑ってはいなかった。

Shibuya Kazuhiro
作家・経済ジャーナリスト・
大正大学表現学部客員教授。
1959年12月、横浜生まれ。
日経BP社で「日経ビジネス」副編集長、「日経ビジネスアソシエ」創刊編集長、
「日経ビジネス」発行人などを務めた後、
2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー
『錆色（さびいろ）の警鐘』（中央公論新社）で作家デビュー。
TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。